

令和 5 年 5 月 29 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00388

研究課題名（和文）ウィリアム・ブレイクとウィリアム・モリスにおける自他共生思想の比較研究

研究課題名（英文）Comparative Studies of Philosophy for Equality, Diversity and Inclusion in William Blake and William Morris

研究代表者

佐藤 光 (SATO, Hikari)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：80296011

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：ウィリアム・ブレイクとウィリアム・モリスの自他共生思想が、寿岳文章、鶴見俊輔、大江健三郎に与えた影響の一端を明らかにした。寿岳の「書物の共和国」という概念は、反対意見の役割に価値を置いており、ブレイクの「対立とは真の友情である」という言葉の延長線上にある。寿岳はブレイクの愛読者であったW. H. ハドソンに人と自然との共生の手掛かりを見出した。寿岳の共生思想への関心の萌芽は、ブレイクと仏教を関連付けた卒業論文に見ることができる。鶴見俊輔は話し合いに基盤を置く共同体の倫理をモリスのユートピア論に見た。大江健三郎は人間存在の持続という主題を描くために、ブレイクのテキストを再編して活用した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

寿岳文章の仕事については、特定非営利活動法人向日庵が資料の保存と整理を進めている。本研究計画に基づいて執筆した寿岳関係の諸論文は、機関誌『向日庵』に掲載されており、ウェブサイトにて閲覧可能である。W. H. ハドソンとブレイクとの関係については、ブレイク研究において十分に調査されておらず、ブレイク研究のオンライン学術誌Blake/An Illustrated Quarterly誌（ロチェスター大学刊）の研究動向欄で、本研究での発見を報告した。鶴見とモリス、大江とブレイクについても、新発見の事実をもとに論文を発表した。ブレイクとモリスの共生思想の受容史研究に一定の貢献ができたものと思われる。

研究成果の概要（英文）：This research project makes it clear that the philosophy of William Blake and William Morris concerning equality, diversity and inclusion had influence on JUGAKU Bunsho, TSURUMI Shunsuke, and OE Kenzaburo. Presenting the concept of 'the republic of books', Jugaku emphasized the importance of opposition, which echoed the words of Blake: 'Opposition is true Friendship'. Jugaku also found a clue for the ideal relationship between nature and human beings in W. H. Hudson who admired Blake's poems. The genealogy of Jugaku's interest in Blake can be traced back to his graduation thesis on Blake and Buddhism. Inspired by the argument of Morris on utopia, Tsurumi discussed ethics to run a community based on discussion and agreement. Oe re-created Blake in his novels to explore the theme of 'the indestructibility of human existence'.

研究分野：比較文学

キーワード：ウィリアム・ブレイク ウィリアム・モリス 寿岳文章 比較文学 比較文化

### 1. 研究開始当初の背景

かつてウィリアム・ブレイク(1757-1827)は難解な神秘主義詩人とみなされた。英国のブレイク受容史において顕著なのは、神秘主義詩人としてのブレイク像であり、A.C. スウィンバーン(1837-1909)、W.B. イェイツ(1865-1939)、アーサー・シモンズ(1865-1945)らによって確立された。これらの初期ブレイク研究者は詩人、劇作家、批評家として独自の存在感を示したことから、彼らが確立したブレイク像も妥当なブレイク理解として広く受け入れられた。

ブレイクの社会改革者としての側面は、十九世紀英国では見落とされたままだったのか。ウィリアム・モリス(1834-96)は社会改革者であり、詩人であり、工芸作家であった。同じように、詩人であり、芸術家であり、銅版画職人であったブレイクに、モリスはどのように反応したのだろうか。ブレイクからモリスに受け継がれたものがあるとすれば、それは何か。モリスがブレイクに肯定的な評価を与えたことは、既に確認されているが、欧米でも、日本でも、専門家によって活発に行われているブレイク研究とは異なり、ブレイク受容史研究には未開拓の領域が多い。なかでも、十九世紀英国におけるブレイク受容については、神秘主義詩人としてのブレイク像があまりにも堅固に確立されてしまったために、改めて研究対象として取り上げようとする動きはあまり見られない。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、十九世紀英国におけるブレイク受容の流れの中で、社会改革者としてのブレイクの思想がモリスにどのように受け継がれたかを解明することである。本研究の独自性は、(1)十九世紀英国におけるブレイク受容において、ブレイクとモリスとの関係を社会改革者という視点から考察すること、(2)研究遂行のための補助線として、日本におけるブレイク理解とモリス理解の歴史的な動向を視野に入れ、柳の民藝運動を参照軸とすること、の二点にある。そうすることによって、自他共生思想の事例研究としての意味を、本研究に持たせることを目指す。

### 3. 研究の方法

自他共生思想を実践的に考えるならば、私利私欲の追求とそれに伴う競争をどのようにとらえるか、という問題に行き着く。本研究では三つの観点からこの問題を考える。

(1)分業。産業革命が進行中であった十八世紀後半は、アダム・スミスの時代でもあり、『諸国民の富』にはピン製造過程での分業を例として、作業の効率化に関する提言が記された。分業は生産工程だけでなく、社会的分業としても出現しており、芸術の世界においては、芸術作品を創造する画家とそれを複製する銅版画職人という役割分担が厳格に運用された。この役割分担に反抗し、越境したのがブレイクであり、銅版画職人として詩と絵を駆使した彼の作品は複合芸術と呼ばれる。ブレイクは、分業のどのような点を問題視したのか。

同じように、モリスは、装飾芸術と美術との乖離に異を唱え、生活と芸術の統合を目指した。モリスが運営したケルムスコット・プレスは、絵画と文字が同じ頁の上に印刷される形式を選んであり、視覚テキスト(絵)と文字テキスト(詩)からなるブレイクの複合芸術と軌を一にする。書物工芸という視点からブレイクとモリスが成し遂げたことを再検討し、両者の共通点と相違点を明らかにして、分業という制度に対して、二人がどのように応答したのかを考える。

(2)商業。ブレイクもモリスも柳も商業に対して否定的な態度を示したが、ブレイクは個展を開き、モリスはモリス商会を設立し、柳も工芸店「たくみ」を開店したことを思えば、彼らが商業を批判しつつも、商業に積極的に関わったことを見落とすことはできない。彼らが商業に見出した問題点と、彼らが商業と折り合いをつけた時にたどり着いた妥協点は、何だったのか。私利私欲の追求や競争とは異なる商業のあり方をブレイクとモリスの中に探る。

(3)ゴシック芸術観。ブレイクはゴシック芸術を生きた形と呼び、モリスもゴシック芸術を理想化した。ジョン・ラスキンのゴシック芸術論を意識しながら、またブレイクがギリシア美術を一貫して否定的に扱ったことを考慮しつつ、ブレイクとモリスがゴシック芸術と中世に投影した、自他共生をめぐる理想の秩序と分業と商業のあるべき姿を、文字テキストと図像の両方を分析することによって明らかにする。

研究方法は大きく二つに分けられる。

(1)ブレイクとモリスのテキスト分析。ブレイクについては、所謂ブレイク神話において压制者として造形されたユリゼンの属性と言動、モリスについては芸術論、社会主義論と『ユートピアだより』を中心に分析を進める。分析結果を柳の民藝論と比較し、ブレイクとモリスの特徴を浮き彫りにする。

(2)ブレイク作品の現物とケルムスコット・エディションの現物とモリスの選集未収録文献の調査。この作業は大英図書館、及び大英博物館で行う。生活の中の芸術という観点でブレイクとモリスを考える場合、装幀、印刷字体、挿画、紙質、ページ・レイアウト、重量、寸法を含めた現物調査が必要不可欠である。

#### 4. 研究成果

2019年12月末に5日間渡英し、テイト・ブリテンで開催されたウィリアム・ブレイク展において資料の収集を行った。また、大英図書館で必要な文献を閲覧し、情報の確認を行った。2週間の調査を予定していたが、校務の関係で短縮せざるを得なかった。

論文「武者小路実篤とシルヴィア・パンクハースト」英国社会主義系機関紙で報道された「新しき村」を発表した。概要は以下の通り。ウィリアム・ブレイクの自他共生思想とウィリアム・モリスの社会主義思想の末裔として、武者小路実篤の「新しき村」とシルヴィア・パンクハーストの活動を位置付けることができる。これは、武者小路に関する新資料と新事実の発見という側面を持つ。パンクハーストと武者小路は社会改革を志し、ブレイクやモリスやクロポトキンに関心を持ったという点で共通するが、パンクハーストが社会主義に共鳴したのに対し、武者小路は社会主義に距離を置いた。『白樺』が歴史的経緯を踏まえることなく、同人の主観的判断に基づいてヨーロッパ美術を論じたように、パンクハーストは、武者小路の思想的変遷や『白樺』の活動とは無関係に、片山潜、堺利彦、山川均に連なるものとして、「新しき村」の活動を理解した。

2020年度はコロナウィルスの世界的な蔓延のために、英国での調査が事実上不可能になった。従って、方針を転換し、当初の研究の目的のうち、(2)研究遂行のための補助線として、日本におけるブレイク理解とモリス理解の歴史的な動向を視野に入れ、柳の民藝運動を参照軸とする、という部分に重心を置くことにした。まず、ブレイクとモリスの両方に取り組んだ日本人研究者として、柳とともに民藝運動を推進した寿岳文章の仕事に注目した。

寿岳文章の書物論と装幀論には、ウィリアム・モリスの書物論が透けて見える。雑誌『ブレイクとホヰットマン』1巻1号の「雑記」で、寿岳はモリスの「ケルムスコット・プレス設立趣意書」に言及した。また『ブレイクとホヰットマン』の余白の取り方はモリスが提案した様式と一致する。一方で、寿岳はケルムスコット・プレスに見られる縁飾り、花文字模様、活字を読みにくいものとして批判し、活字印刷の世界では印刷者自身の個性は排除されるべきである、と主張した。ページレイアウト、紙質、装幀、表紙など書物を構成する各要素がそれぞれの役割を果たしつつ、均衡を保つことによって安定した書物が成り立つ、とする寿岳の書物論は、対等な話し合いによって運営される共同体を求めて寿岳が提案した「書物の共和国」という概念につながっており、モリスの活動の批判的な受容の一形態と見なすことができる。

以上については、拙論「寿岳文章の「書物の共和国」 対話のある共同体を目指して」(『向日庵』4号、2021年)で指摘したが、同論文の内容は本研究計画と部分的に重なるにすぎないので、「令和2年度研究成果」には含めていない。同じように、拙論「柳宗悦と鈴木大拙の分水嶺 物に即して考える」(『現代思想 2020年11月臨時増刊号 総特集 鈴木大拙 生誕一五〇年 禅からZenへ』、2020年)でも寿岳の仕事の意義に触れたが、こちらも「令和2年度研究成果」には含めていない。しかし、これらの調査をしたことにより、ブレイクとモリスにつながる自他共生思想の系譜の上に、柳と寿岳の活動があることを明らかにすることができた。

2021年度は、コロナウィルスをめぐる緊急事態宣言が出されており、引き続きブレイクと寿岳文章について研究を進めた。寿岳文章は1973年に『自然・文学・人間 W・H・ハドソンの出発』を出版した。W.H. ハドソン(1841-1922)はアルゼンチンからの移民として英国へ渡り、鳥類愛護運動家として活動した作家である。なぜ、ブレイク研究者であった寿岳がハドソンに関心を持ち続けたのか、という問いを設定し、ハドソンの著作、ハドソンに関する先行研究、寿岳夫妻がハドソンについて書き残したテキストを調査した。その結果、ハドソンがブレイク愛好家であり、ブレイクの影響下で作家活動を行っていたことが判明した。ハドソンの著作にちりばめられたブレイクからの引用と、ハドソンの伝記的事実をもとに、ハドソンがブレイクの『無垢の歌と経験の歌』を愛読したことを立証することができた。また、ハドソンがブレイクに関心を持ち続けたのは、人と自然との共生のあり方を探る手掛かりをハドソンがブレイクに見出したからである。以上の調査結果を論文「W.H. ハドソンの共生思想と寿岳文章 ウィリアム・ブレイクの系譜の上で」として発表した。

2022年度は最終年度である。5月に海外渡航後の帰国制限が緩和されるようになったが、ブレイクとモリスの共生思想に影響を受けた日本人研究者、思想家についての研究が順調に進み始めたので、継続して調査と論文執筆を行った。研究成果を3本の論文にまとめて発表した。

「鶴見俊輔の「ネガティブ・ケイパビリティ」 ジョン・デューイ『経験としての芸術』の影響の可能性」で、英国ロマン派詩人ジョン・キーツの言葉として知られる「ネガティブ・ケイパビリティ」という概念が、ジョン・デューイの『経験としての芸術』を経由して鶴見に流れ込んだ可能性を指摘した。また、「ネガティブ・ケイパビリティ」は鶴見の中でモリスのユートピア思想と結び付き、話し合いで物事を解決するための共同体の倫理感覚が形作られていたことを明らかにした。

「寿岳文章「卒業論文 ウィリアム・ブレイクの『ジェルーサレム』研究」の背景 なぜブレイクを仏教の言葉で語ったのか」では、寿岳文章が関西学院に提出した卒業論文において、ブレイクの思想と仏教との類似を論じた背景を探った。ピエール・ベルジェをはじめとする欧米のブレイク研究が、ブレイクと「東洋」との関係に目を向けながらも、不十分な議論にとどまっていたことを踏まえて、寿岳が自然と人間との共生、さらに人間と人間との共生の観点から、ブレ

イクと仏教との事実上の対比研究を行っていたことを結論として示した。

「大江健三郎「新しい人よ眼ざめよ」において再創造されるウィリアム・ブレイク」では、大江がブレイクの共生思想を創作に活用した過程を、短篇「新しい人よ眼ざめよ」に基づいて検証した。大江はブレイクの「無垢」と「経験」という概念を応用しながら、「経験」の世界でむしろまれていない「無垢」の力を描いた。人間存在の持続という主題を追求するために、大江がブレイクの絵と詩行を能動的に操作して読者に提示していたことと、大江がブレイクの各種研究書を調査して創作に活用していたことを明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 佐藤光	4. 巻 62
2. 論文標題 武者小路実篤とシルヴィア・パンクハースト 英国社会主義系機関紙で報道された「新しき村」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 比較文学	6. 最初と最後の頁 7-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤光	4. 巻 5
2. 論文標題 W. H. ハドソンの共生思想と寿岳文章 ウィリアム・ブレイクの系譜の上で	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 向日庵	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤光	4. 巻 27
2. 論文標題 鶴見俊輔の「ネガティブ・ケイパビリティ」 ジョン・デューイ『経験としての芸術』の影響の可能性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 超域文化科学紀要	6. 最初と最後の頁 103-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤光	4. 巻 6
2. 論文標題 寿岳文章「卒業論文 ウィルヤム・ブレイクの『ジェルーサレム』研究」の背景 なぜブレイクを仏教の言葉で語ったのか	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 向日庵	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤光	4. 巻 65
2. 論文標題 大江健三郎「新しい人よ眼ざめよ」において再創造されるウィリアム・ブレイク	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 比較文学	6. 最初と最後の頁 7-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------